

慶應義塾という精神

福澤研究センター 准教授
都倉 武之

福澤諭吉が取り組んだ2つのこと

学風と呼ばれる学校の個性は、こんにちでは一般に薄らいでしまい、どこを選んでも同じと思われるかもしれませんが。しかし慶應義塾という学校は、比較的強いカラーがあるといわれているように思います。それはなぜでしょうか。

ご存知のように慶應義塾の創立者は福澤諭吉（1835-1901）です。その福澤が、「何をした人か」と問われると、なかなか答えにくいと思います。教育者、思想家、経営者など様々な顔を持っていた人ですが、何をもって歴史に名を残した人なのか、端的には表現しにくい人です。

ここでは、幕末から明治にかけて、福澤が慶應義塾を手段として、2つのことに取り組んだことを説明してみたいと思います。

一つは人を育てること、それも「独立自尊」の人を育てることです。

もう一つは日本、そして世界をより良くするために「文明」と呼ぶ状態にしていくことです。

「独立自尊」の人づくり ～学ぶ

まず「独立自尊」の人づくりということから考えてみましょう。慶應義塾のホームページをみますと、独立自尊という言葉は次のように説明されています。

「「独立」は権力や社会風潮に迎合しない態度、「自尊」は自己の尊厳を守り、何事も自分の判断・責任のもとに行うことを意味し、これは慶應義塾の教育の基本です。」

言葉で説明されてもあまりピンとこないかもしれません。福澤は人づくりの根幹は学問であると考えました。では独立自尊の人を育てるにはどのような学問を学べば良いのでしょうか。ここで福澤は「実学」という言葉を使います。

実学の対義語は「虚学」、つまり実のない学問ということです。福澤にとっての虚学は儒学です。江戸時代までの学問といえば、儒学が中心でした。

しかし福澤はこの儒学が人々のものの考え方を縛り付けてしまっていると考えます。なぜかといえば、儒学は古代の遠い昔に完成した、世の中のマニユア

ルのパッケージのようなもので、それを完璧に学び解釈して今の世の中に当てはめようとします。これでは、ゼロから自分で考え、創造する発想が生まれてこない、という点に福澤は着目します。何か対処すべき課題が目の前にあっても、儒学に染まった頭では、昔の人の考えたことに依拠して答えを見出そうとするのです。

これに対して福澤が学ぶべきだという「実学」は、この世界に未解明の物事がたくさんあることを前提に、新しい課題を自分で設定し、自分で考えて行動する基礎となる学問です。

なにがその実学に当たるのでしょうか。それは当時の西洋で発達した実証性・合理性を重視する自然科学を基礎とした学問で、science と言い換えることができます。

実学を学べば、未知の物事、課題に直面しても、自分の頭で考えて、その突破に挑戦する人になることができるというわけです。これが「独立自尊」の人だということができるでしょう。

先ほど、実学は science だ、と言いましたが、福澤が書いた文章にも「実学」と書いて「サイヤンス」とルビのあるものがあります。

活発な「文明」社会を目指して ～行動する

それでは、それぞれの人々が「実学」を学んで「独立自尊」になれば良いのでしょうか。福澤は、それだけでは社会は良くなっていかないと考え、同時に「文明」という社会の状態を重視します。

福澤の『文明論之概略』によれば、「文明」とは「天下衆人の精神発達」の状態のことです。天下衆人とはこの日本に、あるいは世界に生活している人間全員のことです。できるだけ多くの人々が精神を発達させている状態になると、社会はどんどん向上して暮らしやすくなっていき、人々も幸福を追求できる、と福澤は考えます。

慶應義塾で教育をして、実学を身につけた「独立自尊」の人を増やす。それだけではダメで、「天下衆人」がこぞって学び、より良くなろうと模索する、つまり精神を発達させる世の中にしていかなければなりません。慶應義塾の出身者はその社会で、いわば船頭役を果たすということです。

では、「天下衆人」がのびのびと精神を発達できる社会とは、どのような社会でしょうか。誰かの言うことが必ず正しいとか、この人の言っていることは間違っていないと逆らえない、というような社会では、精神発達はできません。

誰もが対等の立場で自由に意思を表明し合い、切磋琢磨し合う活発な社会が必要だと福澤は考えます。

福澤はこのことを『文明論之概略』の中で「多事争論」という言葉で表現しました。独立自尊の人を育てながら、その考え方の輪が日本中、そして世界中で響き合っていく「多事争論」の社会が理想的な文明社会と考えられたわけです。

では、多事争論の社会を創り出していくために何ができるでしょうか。福澤は、日本人が自由に意見を表明し合う習慣を持たないことに着目し、1874年に慶應義塾の学生を集めて「演説」や「討論」の勉強会を始めました。「演説」「討論」という言葉は、福澤が「speech」「debate」という英語にそれぞれ当てた言葉で、慶應義塾から広まりました。

福澤はさらに、演説・討論の実習の場として1875年には「三田演説館」という専用の建物を建てて、実演を一般公開しました。これに触発された人々が日本各地で演説会を開催するようになり、これが自由民権運動へと発展していきます。今まで萎縮していた人々が、自分の口で、自分の考えを発信し始めたのです。

これ以外にも慶應義塾では、「多事争論」の活発な社会を創り出すために色々な試みが行われました。

たとえば、服装もその一つです。今残されている福澤の肖像画や写真の多くは、袴を着けていません。福澤はいつも袴を着けずに着流しで過ごしました。今日でも、男性が和服を身につける時、袴を着けてはじめて正装であり、着流しは公式の場に出る姿ではありません。着流し姿を見かけるのは、例えば落語家のように、肩ひじ張らない庶民の文化の場です。

福澤が袴を着けなかったのは何故でしょうか。それは、袴を着けることが、当時の人々にとって「自分は侍の家の出身です」ということを示す記号の役割を果たしていたからです。今では想像できませんが、江戸時代には身分によって服装が厳しく区別されており、基本的に袴を着けていることは侍の身分であることを意味していたのです。明治維新後、四民平等になっても、その意識は染みついたままでした。逆に着流し姿は「町人風」と受け止められました。

身分を意識すると、人は他人との関係を「自分より上か下か」で考えるようになります。上の人にはいいたいこともいえなくなります。つまり多事争論の世の中から遠ざかってしまいます。そこで福澤は、侍出身でありながら、進んで袴を脱ぎ捨て、それでも堂々と卑屈にならずに生活するという選択をしました。これは福澤のトレードマークとして、世間一般によく知られていたようで

す。

この服装を、慶應義塾の学生たちも真似します。当時の集合写真などを見ますと、みな袴を着けていない様子がみてとれます。侍出身という自負を持っていた若者が慶應義塾に入学すると、この服装はかなり受け入れがたいものだったといいますが、ほどなく福澤の意図を理解して、むしろ袴を着けて威張っている人を内心軽蔑して、着流しを誇るようになったようです。

福澤、そしてその考え方に共鳴する慶應義塾の学生は、このような小さな努力が、多事争論の文明社会を実現する第一歩になると信じていたといえるでしょう。

慶應義塾では、言葉遣いにも特徴がありました。福澤はどれほど年下の人にも「〇〇さん」「あなた」と呼びかけたと伝わっています。そしてこの言葉遣いも、慶應義塾の学生は誰もが真似をしました。

今でも慶應の中では、教員に対してでも「さん」、掲示物など文書では「君」付けで呼ぶという習慣があります。これも実は袴と同じ発想です。人によって「様」と呼んだり「閣下」と呼んだり、あるいは呼び捨てにしたり、「おまえ」「貴様」などという呼び方もあります。その呼びかけ方によって、人は自分との上下を意識して、時に高慢になり、時に卑屈になります。年齢の上下や社会的地位などで呼び方を区別せず、みんな一様に「〇〇さん」と呼ぶことで、多事争論の世の中に一步でも近づくと福澤は真剣に考えました。その小さな取り組みが、今でも続いているというわけです。

「多事争論」の活発な世の中を創り出していく取り組みは、卒業生の進路にも関係します。これまでの社会では、侍が高い身分として尊重されました。自分の意思を素直に表明できる人はごく一部に限られている社会でした。その身分差別は、明治以降になりますと、官尊民卑という形で引き継がれます。政治に関与している侍（士）がえらく、それ以外は卑しい身分とされていた士農工商の構造が、政治に関与している政官界を重く見て、民間の事業を軽視する官尊民卑に形を変えて残ったと捉えることができます。

そこで、慶應義塾の卒業生はどうしたか。この社会を変えていくために、進んで民間の仕事に従事する道を選びます。つまり実業界、ビジネスの世界に身を投じていくのです。

こうして慶應義塾出身者からは近代日本の発展に貢献した実業家が多数輩出されました。日本では誰も挑戦していなかった新しい実業の分野や、地方の産業の近代化に取り組んだ人も多数います。その人々の連なりは「福澤山脈」とも呼ばれています。

現在も慶應は実業界に強いというイメージがあり、慶應閥と揶揄されることもありますが、実はかつて誰もが見下していた分野に進んで取り組んだ歴史を背景としているのです。明治の中頃の慶應義塾には「拝金宗の総本山」という汚名まで浴びせられました。慶應の卒業生たちが実業界へ進むことが、どれほど「敢えてする」ことであったかが、このことからわかります。

積極的で青臭い伝統

さて、独立自尊と文明という二つのキーワードから、草創期の慶應義塾が、福澤の考え方に基づいてどのような学問を普及しようとし、さらに社会に向けてそれを実践していたかを概観しました。

最後に簡単にまとめてみますと、慶應義塾に学んだ人々が共有してきた歴史的な思想は、自分が学問を学んだら終わりなのではなく、それを社会に活かし、世の中をより活発にして、より良くしていこうという積極性を持ち続ける、ということにつきると思います。

「まず自分が何かをしてみよう」という前向きで、やや青臭い情熱、使命感のようなものが慶應義塾に染みついた性格ということができるでしょう。卒業生は、福澤諭吉にその姿勢を学び、ただ「福澤先生が言うから正しい」のではなく、自分の選択としてそれに賛同し、その積極性を身につけて社会に巣立ちました。そして、この精神をそれぞれの社会的立場で実践して社会を少しでも良くしていく同志だ、という意識を卒業後も持ち続けました。

もちろん、このような精神は今では、明治時代のように色濃く残っているわけではありませんが、現在でも慶應出身者が強い連帯心、結束力で繋がっているとされるゆえんはここにあります。

慶應義塾で学ぶことを検討されている皆さんにも、ぜひこの精神を受け継ぐ一員として、慶應義塾で共に学び、共に社会への積極性を身につけて頂ければと思います。